(第三種郵便物認可)
(請願中)

磐陽商業新報

月四回一日・八日・十六日・廿一日発行
取扱主事兼編輯及印刷人　福島縣平町南町五九　鈴木禎亮
印刷所　福島縣平町一丁目二九　株式會社平活版所
發行所　福島縣平町南町五九　磐陽商業新報社

生きんとする努力

美しく咲いた櫻花を高い所より見れば只美しい花だとち強くなければならぬ、……と云つた樣な莫然とした憧憬を感ずる許りであるが美しく咲き誇つている其の花の中で花片の散るのを眺めれば自分を忘れて其の美に醉ひ、其の花に憧憬るゝならん、そうしてその花が、より自分に歡樂を與へ、より美を味はしめ自分とそのぬのである、さうして其れ花てふものが離す可からざる關係にある樣に思われるのである。我々の生活に於ても、或る仕事を創め其の仕事を高い所より見下しつゝする樣では、貴い術藝品は到底得られない、其の仕事に自分の心の全部を打込ならば、又新しく來るべきんで、もがき苦しむ處に貴い生命の流れがあり、眞實なる人生の意義があるのではあるまいか、自分は、自己生涯の歩みが如何に遲くとも、或るものに自已の精神……生命を打込んでよしや其の過程に、もがき苦しむとも、それが人間としての本務であり、進化に至らしむる道程であらねばなら と思ふ、或る物の中に渦巻かれ其の中より出で樣とのせる心持ちには少しの空虛もない、只々其の中より出んと焦せる「或る力」が

有るばかりだ。其の力は即…一切に勝利ある……もとより我々の歩む可き道は遠く、苦しく然かも危險なれども、是等の障碍に打勝つ、それが即人生有意義に生きる所以にして、爲めに不斷の强敵戰票すべき誘惑等と常に戰はなければならに打勝つべく努力せねばならぬ、此れが爲めには我々は如何なる犧牲をはらつても其の敵と戰ひ戰つて進んで行かなければならない、故に少しの平和、餘裕さへない、或る敵に打ち勝つた敵に戰いを排まなければならないのである、斯うして進んで行く其處には無限の歡喜と進歩とが、ありはしないかと思ふ

ニイチエは云つて居る「平和を求むるならば新しき戰ひの用意としての平和であれ」と論敵と戰ふ裏面に絶へず自分を大にする事に務めなければなるまい、一度勝利者たらんと苦悶しつゝある時は、其の苦しみ……丈け、慰安歡樂も又大でなければならぬ、進歩も大で

なければならのぬである要するに我々は、自己の全生命を總てに打込み、或るは戰ひ或るは苦しみ以て人生の歩みをより確實に進めて行かねばならぬ是人生本然の務めであつて無盲目でない此の苦しみ此の戰ひの中に言ひ知れぬ大なる力强さと歡喜とを感ずるのである。重ねて云ふ、忍び難い苦しみに殺まれ〳〵つ生の歡喜を求めんとする處に絶大なる生きんとする努力が潛まれて居るのではあるまいか、吾等は何處迄も此の力を培ひ眞に生くる可く努力せねばなるまいと信するものである。

萩原齒科醫院
院長　萩原義雄
石城郡平町南町　電話二五九番

平市況

白米麥
米一石……三二、五〇
上同……三二、〇〇
中同……三〇、五〇
麥上……一七、〇〇
同下……一五、〇〇

石炭
塊炭……噸一五、〇〇
同中……一三、〇〇
同下……九、〇〇

木炭
檜丸……表一、四〇
雜同……一、二〇
雜割……一、一〇
檜割……一、一〇
椚丸……一、七〇
同割……一、四五

吳服
晒上……七〇
同中……六〇
同下……五六
遠州縞上……一、四〇
中……一、一〇
下……一、〇〇
銘仙上……二、〇〇
中……九、〇〇
下……七、〇〇

野菜
白菜……〆
ヘラナ……〆
大根……二〇
葱……二〇
午蒡……三〇
人參……一七

紙類
機械半紙上等……〆四、〇〇〇
仝中等……三、〇〇〇
仝下等……二、〇〇〇
洋半紙上……三、五〇〇
仝中……二、九〇〇
仝下……一、五〇〇
樟子紙上一本……八〇〇
仝中等……四〇〇
仝下等……三〇〇

茶
本場上……貫二、〇〇〇
仝中……一〇、〇〇〇
仝下……八、〇〇〇
其他四圓より七圓迄

良品格安の買へ良き店
仙臺屋吳服店
平町一丁目　電話一一七番

煙草、砂糖、鹽、荒物雜貨
米穀商　吉田卯三郎商店
松崎、菊地、芹澤自動車平窪停留所前
至急御入用の際は自動車にて御届け致します

福島縣平町
釀造元　山崎合名會社
電話(營業部一〇番　釀造工場二七番)
振替東京一九七五五番
上野車坂町四三
東京支店
電話(浅草五七二八番)
振替東京六八三二番

二本松電氣株式會社　小名濱支店
福島縣石城郡小名濱町

株式會社平活版所
植田支店
電話一〇五番

營業品目
各種自動車部分品幷附屬品
各種・タイヤー・中袋
ガソリン幷モビール油
自動車幷ニ附屬修繕
タイヤー・中袋修理
磐城國平駅前　電話六一一番
平サービスステーション

見るからに心地よき新柄お花見の御仕度は是非弊店陳列場へ
三井吳服店
平町丁目　電話三八番

既製品
洋服各種
在庫豊富
磐城平町二丁目
かや洋服店
電話二〇三番

學生カバン各種
中野洋品店
磐城平町二丁目　電話五三番

酒銘
近盛馬目支店
近江屋號
磐城平田町二十五番地　電話二五四番

磐城セメント特約販賣店
和洋金物問屋
金屋商店
平町
電話長九番
電話三九番

◆廿三日より◆
松竹日活　平館

結婚二重奏

山路扶美子は、女學を出る前に口約束した法科の學生正木の性格や趣味の組野を不滿に思つた。

彼女は吉村家で小說家立花芳雄と會つた、純情的な立花と彼女は女らしい好意に熱いあく手を求めた。

逗子ホテルで二人りは會つた。然し二人の戀は成就せしめなかつた。立花を誘惑に努める新生劇團の女優木村彌生があつた。そして彌生は立花を征して孔雀の如く羽をひろげた、再び扶美子が立花の許を訪れた時、一夜の運命の轉戀によう然として立花の許を去つた。

立花は扶美子との問題を小說化すべく伊豆に住んだ。彌生は立花を僞つて姙娠したと云つた。

扶美子は不滿乍ら立花に反ばつ的に正木と結婚の意決した。然し「夫婦」の生活をしなかつた

立花は彌生と結婚した……然しあまりにも彌生は僞りの女性であつた。

立花の出版した「彼と二の女性」この小說は果して……

藤の家に謹愼中此の家の娘菊野は新三郎を慕ふ樣になりました。

菊野には番頭の半次が許嫁でありました。

半次は烏組に新三郎の事を內通しました。

新三郎は烏組を相手に物凄い劍を振りました。

半次は自分の不甲斐なさを悔ひた時には……？

第三回

燃ゆる渦卷

連續幕末巷談　第五篇卅五卷

新徵組が不意のちん入に機敏な柱小五郎は早くも大葛の中に身を隱した……

鋭い土方の白刃は鞘走つて葛籠籠の中央の差し貫いた……果して……

劍史

浪人笠

天保十三年の秋日本に始めて禁酒令が出た頃の事です放蕩の旗本や浪人が組織してゐた烏組の副統領脇坂新三郎は戶塚惠之進と僞名して一味の墮落をなげき脫黨しました。

烏組は彼を討たんとしました。

◆開店披露◆

小生只今まで平窪村に在つて營業仕り居り候へども お客樣に御不便を來す事多々有之候に付此の度お客樣の御便宜を圖るためにに平町搔槌小路菊地自動車部隣に出張販賣致し居り候へば舊に倍しお引立の程を偏にた願申上候

吉田米穀店　吉田邦三郎

リモ科齒アイ醫院
長院　森合芳男
植田町本町

酒銘　白馬の雪
釀造元　辰の口本家
松本德一

荒物陶器卸商　福島縣平町新川町　長　松崎長三郎
電話一七二番　振替東一五九九

平町停車場前
明雲堂眼科醫院
電話六六九番

各國文房具・運動器・萬年筆
新刊圖書・雜誌・唐紙用紙類
書肆　清光堂本店
平町二丁目九番地
電話一三一番　振替五三八八番
新刊書籍御注文の際は迅速確實に御取次ぎ致します

中等教科書及辭書
學生帽・カバン・石盤類
學用品文房具　問屋　文　魁文堂
平町字搔槌小路五
電話三一三　振替仙台三〇六九

磐城無盡商會
會長　小宅嘉久治
平町一丁目

紙問屋　壽　坂本紙店
電話一八番

御料理
一の井
平町田町　電一六七

帝キネ・マキノ直營
有聲座
電話四四六番

ルートフナ尺着
シリスモ尺着
仙銘樣模
平町三丁目　龜田屋　電五七

平活販所
電話三〇二番

御用命の際は（電四一一）へ多少遠近に拘はらず迅速に配達致します
醬油　互助
和キッチン和醬油
平町外平窪（電話四一一番）
釀造元　和　草野屋本店

茶卸小賣
小沼辰次郎
平町南町五九

酒銘　稻妻
石城郡植田町
古川酒造店

入學案內

募集人員
本第一部（從來ノ高等女學部ト畧同シ五十名）
本第二部（從來ノ師範部二年卒業ト畧同シ五十名）
技藝高等（從來ノ技藝部高等科ト略同二年卒業五十名）
技藝速成（從來ノ技藝部速成科ト略同五十名）

學則改正
本校ハ從來縣知事ノ認可ニヨリ經營シ來リタレドモ時勢ノ進運ニ伴ヒ文部大臣ノ認可ヲ得ベク目下申請中ニ付キ近日中認可ノ見込

本校ノ特色
本校ハ實業學校令及ヒ職業學校規程ニ基キ女子ノ淑德ヲ涵養シ裁縫其他女子ニ須要ナル實際的學識技藝ヲ授クルヲ以テ目的トシ併セテ教員タラントスルモノヽ爲メニ之レガ養成ナス

卒業生特典
本校本科ノ卒業生ハ高等女學校ト同ジク官立專門學校ニ入學スル資格ヲ得ラル、見込

入學資格
一、高等小學卒業者又ハ本年三月卒業見込ノモノ
二、又ハ同等以上ノ學力ヲ有スルモノ

出願手續
入學願書履歷書ニ入學料ヲ添ヘ本校ニ提出ノコト但シ入學料二圓

出願期日
三月三十一日

學則並入學願書履歷書用紙ハ郵券二錢ヲ添ヘ本校ニ請求セラレタシ

寄宿舍
通學困難ノ者ハ成ルベク入舍スルヲ宣シトス
食費ハ一日二十五錢內外

文部大臣認可申請中
平陽女學校
平町搔槌小路
電話四四五番